

本山から寺号を与えられた。寛文13年〔1673。改元延宝元年〕現在地に移り今日に至る。

資料 仙台人名大辞書（菊田定郷）

松山町史（松山町編）

わたしたちの松山町（松山町教育委員会編）

武道（小原 伸。「宮城県史」18の内）

岩出山町史下巻（岩出山町編）

仙台郷土史夜話（三原良吉）

伝説（三原良吉。「宮城県史」21の内）

宮城県百科事典（河北新報社編）

仙台映画大全集（集団MISSA）

## 74. 昔の仙台市動物園に虎がいたか

問 昔の動物園とは、広瀬川河川整備事業として、昭和9年に造成を終った評定河原埋立地の一部、8千146坪を敷地として、仙台市が昭和11年4月1日新設開園したもののことです。動物は、丁度タイミングよく東京浅草公園花屋敷から35種100点に及ぶ主要動物を一括譲受け購入することができました。3月中に搬入された、これら動物中に、<sup>(2)</sup> 印度産の虎が1頭含まれていたのです。<sup>(3)</sup> 「仙台市交通事業五十年史」（仙台市交通局編）に「花屋敷からの購入動物調」として、そのことが明記されています。また「仙台市史」第2巻にも、虎を含む動物名が記されています。「昭和11年宮城県仙台市事務報告書並財産表」には、昭和11年12月末現在の収容動物数が記載されていますが、この方は動物学的分類による綱・目別に種数・点数の数字が示されているだけになっています。<sup>(4)</sup>

なお、この動物園は、仙台市電気水道事業部電車事業所の主管で管理運営され、東京以北唯一の動物園として、地元はもとより他県からも多大の期待をもって歓迎されたものでした。開園の年の入園者は31万人を数える盛況でしたが、やがて戦時体勢に入るにつれ、来観者は漸減の一途を辿ることになってしまいました。昭和19年には戦局がいよいよ急迫を告げ、空襲の危険も予想される状況となったため、猛獣類の非常処分を余儀なくされ、3月下旬虎・ライオンなど11点が射殺されたのでした。時節柄来園者も寂れ、自然休業状態に入っていたところ、翌20年7月10日の仙台空襲で被災焼失、動物園はそのまま廃止となったのでした。

注(1) 琵琶首の東側で広瀬川に沿ったところに、寛永13年〔1636〕評定所〔もと裁許所といった〕が設置されてから、この川岸を評定川原と称した。

注(2) 東京都台東区浅草公園にあった「浅草花屋敷」。嘉永3年〔1850〕頃植木職森田六三郎の

創設したもので、四季の草花や盆栽をはじめ、各種の動物を飼育し、また菊人形・あやつり人形・山雀〔やまがら〕の演芸、犬・猿芝居などを見せ、大衆に親しまれた遊樂の場で、戦前まで盛況を続けた。「吾輩は猫である」(夏目漱石)にも『孔雀は動物園、浅草花屋敷等にちらほら見受け候へども』などとある。

注(3) 「トラ」はタイ語系南方語起原といわれる。食肉目の猛獣。アジア特産。全長3mにも達し、毛色は上部と両側とは黄色や黄褐色で、黒縞があり、腹面は白く、尾には黒い環がある。口は大きく鋭い牙をもち、爪は鉤状に曲っている。産地により、毛や色が異なり、インド産のものは短毛密生し、中国東北産のものは「マンシュウトラ」で毛が長い。森林・水辺に住み、昼間は多く洞穴に潜み、夜間出て活動し、水泳も巧みで、種々の鳥獣を捕食する。

注(4)

花屋敷からの購入動物調

動物名	産地	員数	動物名	産地	員数	動物名	産地	員数
象	印度	1頭	鴨	日本	9羽	アシカ	北米	1頭
狒々	アフリカ	1頭	鶴	同	1羽	キリンヅル	アフリカ	1羽
白熊	北極	2頭	孔雀	印度	1羽	南洋鶴	印度	1羽
ペリカン	欧州	3羽	青鷺	日本	1羽	猿	同	17頭
獅子	アフリカ	1頭	赤猿	印度	1頭	山鶏	台湾	2羽
丹頂鶴	日本	1羽	鷺鳥	日本	1羽	五位鷺	日本	1羽
オットセイ	樺太	1頭	鶉	同	1羽	熊	同	2頭
カンガルー	濠州	1頭	鳩	同	10羽	穴熊	同	1頭
熊	北海道	2頭	狐猿	南洋	5頭	白鳥	同	1羽
印度雁	印度	4羽	黒スワン	濠州	1羽	スワン	同	1羽
白鷺	日本	8羽	黒豹	マレイ	1頭	虎	印度	1頭
朝鮮雁	朝鮮	2羽	豹	印度	1頭			
オンドリ	日本	8羽	川獺	支那	3頭	計		100点

これだけでは少ないので、さらに各方面から<sup>ふたごらくだ</sup>双峰駱駝、<sup>ろば</sup>驢馬、シマハイエナ、ヤマアラン、ヌクテ、火喰鳥、エミウ、ニシキ蛇、小笠原大蝙蝠、その他亀類、<sup>おおむ</sup>鸚鵡類、インコ類、鳴禽類、水禽類、猛禽類、鶉類等、87種、200余点を購入し、いずれも設備完成の翌11年3月下旬までに到着するように手配した。

市民からの動物などの寄付 工事が進み開園が近づくに従って、市民からの現金や動物の寄付の申し出が次第に多くなってきた。当時の記録を拾ってみると、3月から9月までに寄付されたものは、現金が3,750円、動物では、熊、鷹、ライオン、オットセイ、鹿、孔雀、<sup>あざらし</sup>海豹、<sup>おおとかげ</sup>兎、大蜥蜴、評価額は約2,184円、その他鳥類や園内に植える吉野桜、枝垂桜など多数の植物が寄付されている。

資料 仙台市交通事業五十年史(仙台市交通局編)

## 75. 「佐目馬」・「駿馬」・「毛馬」

問 「肯山公治家記録」に、馬の献進のことが書かれていますが、その中の「佐目馬」、「駿馬」、「毛馬」とは、どんな馬ですか。また、どう読めばよいのですか。

答 「肯山公治家記録」後編巻之96の中の、元禄12年〔1699〕閏9月14日の記事に、次のようなところがあります。<sup>(1)</sup>

『十四日己酉〔つちのととり〕

松平淡路守殿へ、大堀正助使者トシテ、先達<sup>(2)</sup>佐目馬駿馬ノ中所望セラルニ依テ、佐目馬贈遣、駿馬ハ宜〔よろし〕カラスト雖モ、一覽ノ為兩匹牽セ遣サル、且取次へ正助談スルハ、公御不勝手ニ就テ贈答断ラレ、近年親戚方ヘモ馬ハ送ラレス、乍然〔しかしながら〕毛馬御所望ノ儀、且御懇意ト云ヒ贈遣ノ由ヲ述フ、兩匹ノ中留ラルヘキ所意ニ称〔かな〕フニ因テ兩匹トモニ受取ラル由直ニ返答セラル。』

上文の中にありますような御質疑の3点は次の通りです。

### 1. 佐目馬

「さめうま」と読みます。

白毛の馬。また、両眼の縁の白い馬、或いは虹彩の白い馬のことです。

### 2. 駿馬

「ぶちうま」と読み、また「はくば」と音読みにすることもあります。「駿」の音は「はく」。『和漢三才図会』（寺島良安）にも『駿 音博〔はく〕布知〔ぶち〕』とあります。

毛色がまだらの馬。種々の毛色が入りまじっている馬のことです。<sup>(3)</sup>

### 3. 毛馬

「もうば」と読みます。

馬の毛色のひとしいものをそろえること。また、毛色のひとしい馬をもいいます。

注(1) p.65の注(2)参照。

注(2) p.115の注(5)参照。

注(3) わかんさんさいずえ。p.551 注(7)参照。

資料 古語大辞典（中田祝夫編）

日本国語大辞典（小学館）